

須賀川市立義務教育学校「稲田学園」学園だより

と う う ん
稲 雲

令和7年度 第5号

令和7年6月13日発行

発行者：校長 田中 朗裕



○令和7年度の中体連がスタートしました

6月3・4・5日の3日に渡り、中体連が開催されました。本校の生徒は、軟式野球、卓球、ソフトテニス、バドミントンの4競技に出場しました。軟式野球が今年度から県中大会に一本化されたことから、支部大会として実施されたのは3つの競技でした。各会場を回って応援をしましたが、どの会場でも勝利を目指して本気でプレーする生徒の姿を見ることができました。昨年度からの生徒の成長を目の当たりにして、私自身も「努力を積み重ねることの意味」を再確認することができました。県中大会は、6月17日（火）と18日（水）に実施されます。

＜大会結果＞

軟式野球（県中大会1回戦） 対 郡山六中 11－4（6回コールド） 勝利 2回戦進出

卓球 男子団体 ベスト8 県中大会出場

男子シングルス ベスト8 県中大会出場、男子ダブルス 第2位 県中大会出場

女子シングルス（須賀川スポ少） 第2位 県中大会出場

ソフトテニス 女子団体 決勝トーナメント出場

バドミントン 女子団体 第2位 県中大会出場

女子ダブルス 第1位、第2位 2ペアが県中大会出場

女子シングルス 第3位、男子ダブルス（稲田 Jr） 第3位



○最後の「ドライトマトプロジェクト」始動です!!

6月4日（水）に今年度が最後となる「ランドセル・ドライトマトプロジェクト」が始まりました。次年度以降も自分たちが使用したランドセルをアフガニスタンに送る「ランドセルプロジェクト」は継続しますが、「ドライトマトプロジェクト」は今年度が最後となります。当日は地元企業のJ-RAPさんにご指導をいただきながら、トマトの苗植えを行いました。これから毎日水やりをしてトマトを育てていきます。収穫したトマトは、J-RAPさんにドライトマトにしていただき、販売したお金でランドセルを送る予定です。

夕方には、テレビで苗植えの様子と児童へのインタビューが放送され、地域の方からこの取組についてのお褒めの言葉と励ましのお電話をいただきました。6年生が、最後の1年間をどのように締めくくり、新しいプロジェクトにつなげていくのか楽しみです。



○力強いエールとメッセージをいただきました

5月28日(月)から3週間、本校の卒業生が養護教諭の教育実習生として実習を行いました。養護教諭の業務の体験や各種検診の補助など、一生懸命に実習に取り組んでいました。最後の週には、6年生で「歯肉炎を予防しよう！～正しいブラッシングの方法について～」という保健の授業を行いました。また、7・8年生には「先輩から学ぶ」集会で、講師としてご自身の体験等を含めたお話をしてくれました。稲田学園の先輩として、後輩に力強いエールとメッセージを送ってくれたことに感謝です。



○「元気チェック」の「個人カルテ」を配付します

先月実施した「元気チェック」の結果を「個人カルテ」として、各家庭に配付させていただきます。カルテには、各個人の3日間の「就寝時刻」「テレビ・ゲームの使用時間」「スマホの使用時間」が記載されています。本校の今年度の重点事項である「メディアコントロール」は、学校とご家庭が協働して効果を上げていきたいと思っておりますので、カルテをもとに、ご家庭でも話し合いの時間をとっていただきたいと思います。

○「全体授業研究会・事後研究会」を実施しました

6月11日(水)に、麻布教育研究所から講師の先生をお招きして、第1回現職教育全体授業研究会・事後研究会を実施しました。3・4校時目にすべての先生の授業、5校時目には、9年生の社会科の授業を参観していただきました。放課後には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業参観を通して「子どもから学んだこと」について協議をしました。その後、授業改善に向けた授業研究の方法等について講師の先生からご指導をいただきました。



随 想

「先生は教える人？子どもは教えられる人？」 ～学びの变革～

今、学校には「主体的・対話的で深い学び」の視点「自ら進んで学び、自分の興味や関心に基づいて、課題解決や目標達成に取り組み、児童生徒同士や教師、地域の人々などとの対話を通して、自分の考えを広げたり、深めたりしながら、理解を深める。そして、単に知識を暗記するだけでなく、学びの過程で、知識を他の知識と関連付けたり、問題解決の視点から考えたり、自分の考えを形成したりすること」から、授業改善をすることが求められています。つまりこれまでの「学び」から变革をしなければなりません。

そこでいつも考えることがあります。これを実現するためには、「先生が教える人」で「子どもが教えられる人」という考え方を変えなければならないのです。「学校は教えてもらう場所ではなく、自分で学ぶ場所である。」と子どもたちにも思ってもらいたいです。子どもたちが、そういう思いをもって登校するから、教師は、子どもが自分で学ぶことができるように、課題や環境を工夫し、学び方や学ぶための資料などを提供するようになるのだと思います。もちろん授業中に何もしないわけではありません。子どもの個性が多様であるのと同様に、学び方も多様ですから、それぞれに合う多様な学びを可能にする努力をします。それができて、子どもたちが自分の力で真剣に学ぶ姿が見られたら、私たちは幸せになると思うのです。